

## 「大学入試のあり方に関する検討会議」における意見

日本私立中学高等学校連合会 会長 吉田 晋

英語4技能の評価の導入に関しては、既に高大接続改革において決定され、本検討会議の議論の中でも、総論的にはその必要性を認められており、民間の資格検定試験についても、各大学の総合型選抜や学校推薦型入試では多く利用されている。それにも関わらず、一般入試については、大学入学共通テスト（以下「共通テスト」とする。）において、公平性・公正性が担保されないなどの理由から採用されない方向となっているように見受けられる。

こうしたことに伴い、文部科学省並びに共通テストを作成し実施する大学入試センターとしては、新学習指導要領も踏まえ4技能を学んできた高校生たちに対する英語を含む外国語の試験について、50万人に一度に実施することが困難であることが明確であるにも関わらず、令和6年度以降の試験をどのように実施していくのか、今までも再三質問してきたが、回答は出されていない。このまま2技能試験を続けていくのであれば、4技能の評価はどのように取り扱っていくのかを明確に示すべきではないかと考える。

記述式問題については、大学入試センターによる画一的な模範解答を基準として一律に評価するのであれば、本来の記述式問題導入の趣旨からかけ離れたものとなり、新たな学力を適切に評価できるのか甚だ疑問である。同じ問題であっても、アドミッションポリシーに基づき、各大学、各学部、各学科において、求める学生の資質能力やその水準は異なるはずであり、本来であれば学生を受け入れる側で適切に出題し、評価をするべきなのではないか。

これらの現状を考えると、今まで高大接続会議等で時間をかけて、我が国の将来を担う子

どもたちの資質・能力を育むべく進められた教育改革は振出しに戻り、共通テストについては、従来通りのセンター試験を踏襲したものとなることを懸念する。かかる共通テストを利用する大学の入試の在り方によっては、初等中等教育は、何ら改革の必要性がなくなり、日本の教育自体が世界に遅れを取っていくことへの不安を禁じ得ない。

今後、大学入試において高等学校等の学習指導要領で履修を課されている英語4技能の評価、そして思考力、判断力、表現力を柱とする新たな学力の評価は、どのようになされるのか不透明である。以上のことを踏まえれば、共通テストにおいては、完全な4技能試験ができないのであればそれを明確にした上で、試験形態としては2技能を維持するとしても、4技能の学びを反映する問題に作題を改善すべきである。また、記述式の導入が不可能なのであればそれも明確にした上で、思考力・判断力・表現力を発揮しなければ解けない問題に更なる改善を図るべきである。

その上で、共通テストがその程度のものになるのであれば、各大学の個別試験の改善が極めて重要となる。国は個別試験において、アドミッションポリシーに基づき、英語4技能試験や記述式問題を課して、高等学校で習得した学力をしっかりと評価する大学を強力に支援する観点から、財政面でも強いインセンティブを付与するとともに、各大学の取り組みの改善状況を、一日も早く受験生、高等学校等に一覧可能な形で示すべきである。

また、高校生以下の生徒たちにこれ以上混乱を与えないためにも、国が産業界と協力し、大学卒業後をしっかりと視野に捉え、初等中等教育の蓄積の上での大学における就職時や昇進時、海外赴任時に求められる英語力の現状や将来的な見通しを明らかにするとともに、大学の主体的な取り組みを強く促し、既に6年以上学んで来ている高校生たちの新たな学力を、否定するような制度に引き戻されないことを、改めて願っている。